

石川県白山自然保護センター普及誌

はくさん

第28巻 第3号



南竜ヶ馬場ビジターセンター

南竜ヶ馬場は、白山御前峰と別山の鞍部に位置し、標高2,000m～2,100mの南西に開けた平坦地で、多彩で親しみやすい自然景観を有した所です。

また、室堂と並び山頂上における自然体験の拠点基地として、ビジターセンターや南竜山荘、野営場等が整備されており、夏から秋にかけて多くの登山者で賑います。

南竜ヶ馬場ビジターセンターは、「白山緑のダイヤモンド計画」の一つとして新たに整備され、平成11年7月から利用されています。鉄骨2階建て、延べ330㎡の建物は、白山の自然を紹介するスペースやレクチャースペース、休憩スペース等を有し、夏期には、自然解説員が常駐し、自然との会話のお手伝いを行っています。また、南竜山荘や野営場等の利用者の現地受付もを行っています。

静けさと優しさを持つ南竜ヶ馬場で、自然の生命力や不思議について体感してみてください。

(柳田 亨)

白山の雪溪 - とくに千蛇ヶ池雪溪について (後編)

伊藤 文雄

1998年秋の千蛇ヶ池雪溪

近年(1986~)の越年雪の規模が縮小傾向にあることは、前号で述べました。1998年冬期は降雪量が特に少なく、5月頃より推測されていたとおり、夏(8/10)の池の残雪は例年の10月の越年量程度まで縮小しました。

10月6日の通常調査で、池の北東端の氷(残雪)を除く大部分(99%以上)で水面が現れており、越年雪が事実上視界から消失した事を確認しました。この状況は新聞やテレビで報道されて人々の関心をかうところとなりました。しかし、池の80%以上の部分で下方から上昇する多数の小気泡(20~30個/m²)が水面付近ではじけており、池の南端付近で水深の浅い個所の泥を取り除くと白い氷が現れてきました。これらの事実から、池全体では現水面下にまだ相当規模の氷体が存在すると推測できました。

10月25日の確認調査では、あいにく池の大部分は氷化した薄い新雪で覆われていたものの、池の底までの深さを測定しました。また、池の東と南端の水面付近の土砂の下には、池底の方向に傾斜する厚い氷があることを確認しました。水面上に現れている残雪はありませんでしたが、当日、同時に地上やヘリコプターから撮影された写真により水面下の氷体の規模等が推定できました。

11月6、7日の追認調査では、池の水位が下がりようやく氷体の一部が水面上に現れました。一方、一般の方々の確認も続きましたが、約1週間後には積雪があり、雪に埋まったので束の間の出現で



写真1 湖面が現れた千蛇ヶ池(1998.10.13 撮影 小川弘司)

した。以上の期間中に得られた観察データや撮影されたビデオテープなど多数の写真の検討（偏向、立体視、画像解析）の結果、多くの興味ある事実が明らかとなりました。

1978年当時、1964年の残雪（氷）は気象資料からの推定値が現実的でないで消滅したものとされました。上記の知見をふまえて再び写真（1964年撮影）をみると、不鮮明ながらも池の水面形と水面上の氷体の形が1998年秋の状況と似通っています。水面を平坦な池底と氷体を大きな岩と見誤った訳です。詳しい比較では、1964年の越冬氷は1998年秋よりやや大きめの氷体で、一部を水面上に現わした状態で越冬したものと考えられます。これにより1964年頃より以前の推定越冬量が見直されました。

このようにして1998年秋も越冬氷の存在が確認されました。しかし、なぜ千蛇ヶ池の越冬氷は水面に浮上しないのでしょうか。池の深さの実測と写真等の検討から、現在の氷体の周囲を含む池の断面が鍋底形であり、底部付近は岩、礫、泥と内部氷から成る地盤層と推定できるので、氷体が地盤の層と一体化しているためと考えられます。また、なぜ氷体と地盤層は分離しないのでしょうか。越冬した氷体（越冬氷）には、通常の雪渓で見られる雪穴と同じような氷穴が垂直・水平方向とも多数認められたことから、この時期の池全体の水準（水平）を保つ水流（僅かな温度差による）が推測され、雪穴が夏に池の周囲から流れ込む水路であるのと同じく、氷穴が氷体に（水中での平衡と底部での融解に対して）影響を与えているものと推測されます。

また、池の西端を除く水面付近に残る氷板層、東と南端で池底に続く水面下の斜面氷、および水面以上の斜面では1998年秋（南端緩斜面：氷板）と1999年秋（池の北側斜面の崩落によって現れた氷塊）さらに2000年秋には池の東端付近でも氷板が確認されています。これまでも池の東端と西端の大きな雪穴中や南端と西端の地面が雪渓と接する付近で、このような氷をたびたび見かけています。池の断面形や周囲の地形も考慮すると、この氷はたとえ不完全にせよ連なっている

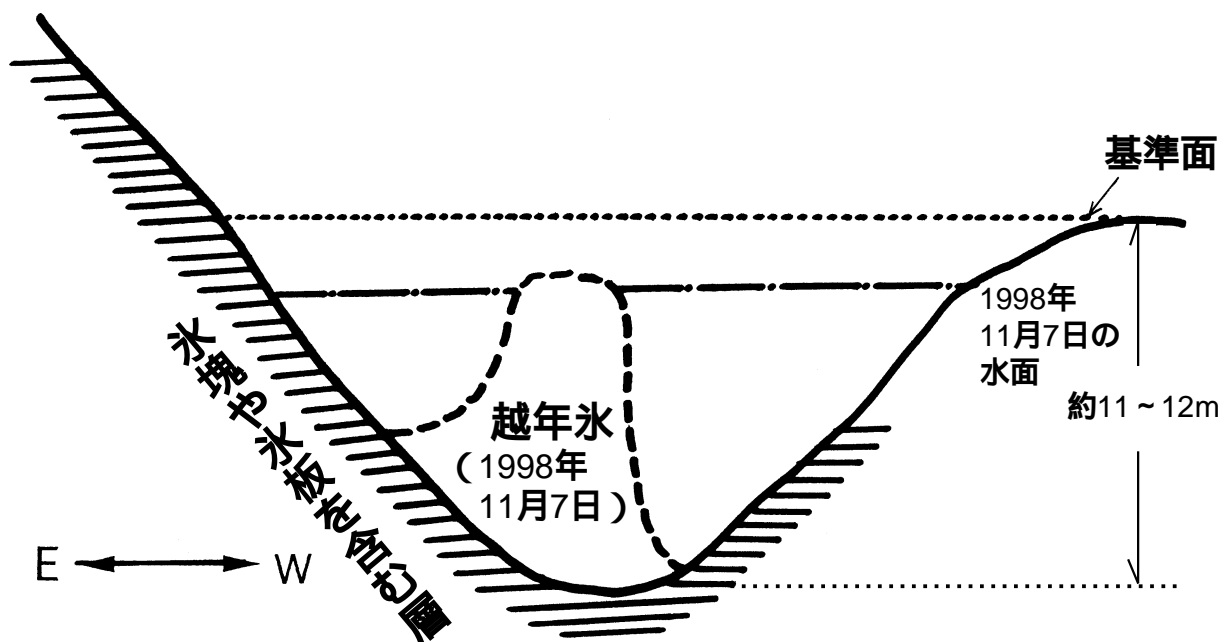


写真2 水位が下がり、氷体の一部が現れた千蛇ヶ池（写真1,3は西側方向から撮影）（1998.11.7 撮影 矢田豊氏）

(氷板層)と考えるのが自然です。すなわち千蛇ヶ池雪渓の下の地表付近には、相当な規模の広い氷板層が常時存在し、越年氷もその一部であると推測できるでしょう。構造体として氷板層を通年保持する千蛇ヶ池付近の地層は、更に電気探査や地中温度変化等の詳しい検証が必要でしょうが、永久凍土層といえるかも知れません。我が国での永久凍土層は大雪山や富士山、さらに最近では立山でも発見されています。

これまで越年氷としてきた氷体と地表下の内部氷を一体化して考える必要が生じてきました。すると池の中の氷や雪というより、山腹斜面で内部氷を有する地層の、窪地に現れた氷体の周囲に秋頃までは残雪が、そして時には窪みや隙間に融解水や地表水が滞留した(池)と捉えるのが適当なのかも知れません。規模は小さいもののヒマラヤ等で見られる氷河湖と類似した構造です。

以上に関連して、弥陀ヶ原から山頂付近にかけての残雪が長く残る地表面の至る所で、氷成といわれる亀甲模様(生成には長い年数が必要)が観察されます。以前に残雪が消えた直後の室堂平で地表から30cm付近にレンズ状氷を数個確認しており、同付近では残雪が消えた後も1週間程は地層が堅くて掘削が困難との話もあります。白山の標高約2,000m以上では、残雪下の地表付近に氷や氷板を含む、又は凍結している層(0)があり、残雪の後退に多少遅れて融解(消失)していると推測されます。室堂平における地表面温度の測定(例えば本誌第27巻第2号)はこれを間接的に証明していると考えられます。白山の地層がこのような特性を示す理由の一つに、その地質とも関連した豊富な含水があげられるでしょう。詳しくは別の機会とします。毎年融解してしまう凍土層は季節凍土層といわれます。



千蛇ヶ池の断面模式図

1999年秋、2000年夏

1998年秋、千蛇ヶ池雪渓の越年氷は、例年に比べてかなり縮小しているものの、消滅することなく無事越冬しました。1999年冬も少雪でしたが秋の越年氷はわずかに規模を回復しています。氷体には水面付近の氷穴はもはやなく（多分内部でも）、そのかわり南北の地面と接する位置に数m幅の深い溝が形成されており、池周囲からの流入水の通路を担っていると考えられます。98年秋と同じく池の周りでは内部氷も確認されていますが、池の北東端斜面で微細土を一様に含んだ氷塊が新たに見つかっています。斜面の崩壊に伴って内部氷（塊）の破断面が現れたものと考えられます。

2000年夏、雪渓の残雪は全く例年の規模を回復しました。しかし、昨今の温暖化環境では、千蛇ヶ池が次に姿を見せるのは案外早いかも知れません。

現地は高い標高にあるので、労力のわりに迅速な行動と的確な判断が容易でなく、特に晩秋には滞在時間も限られます。にもかかわらず98年秋の確認調査から現在に至るまで、多くの方のご協力を得ました。とくに矢田 豊氏（石川県林業試験場）と神田健三氏（加賀市中谷宇吉郎雪の科学館）には格別なご協力を頂きました。

< 福井大学教育地域科学部 >



写真3 2000年秋の千蛇ヶ池（2000.10.5 撮影 林 哲）

白山麓の道場 真宗信仰伝播の基盤

澤 博勝



(旧)教覚道場 (旧表家 石川県立白山ろく民俗資料館移築)

加賀国二口村(現、尾口村)の庄屋も勤めた表家は、先祖・久左衛門きゅうざえもんが蓮如に帰依して道場を開いたという。近世を通じて道場主を勤めたとされる。写真の道場は幕末期の創建。石川県有形民俗文化財。

道場今昔

「道場」という言葉で第一に思い浮かべられるもの、それは剣道や柔道といった武道の道場でしょうか。あるいは、禁煙や禁酒、さらにはダイエットなどを目的とした施設等も「道場」と表現することが多いようです。このように今日では、もっぱら身体的「修行」の施設を「道場」と呼んでいます。中世後期から近世(大まかには室町時代から江戸時代)には、民衆の日常生活に深く根付いた信仰生活の基盤(精神修行の場)となった施設を「道場」と呼びました。こうした施設は、かつては全国各地に存在し、今日でも北陸など一部の地域(白山麓に代表される浄土真宗の門徒が多い地域)には残っています。

宗教施設としての「道場」は、現在の浄土宗・浄土真宗・日蓮宗・禅宗などにつながる「鎌倉新仏教」と俗称される諸宗派に存在していましたが、加賀(江沼郡)から越前(大野郡)に跨る白山麓に展開したものは、浄土真宗の道場が中心でしたので、ここでは以下浄土真宗の道場に限定して述べて行きたいと思います。なお、近世では現在の浄土真宗は、公的に浄土真宗と呼ばれることはな

く、また、歴史研究では、「真宗」の呼称を使うことが一般的ですので、近世のことを中心に述べます。ここでは、原則的に真宗で統一したいと思います。

真宗の道場とは

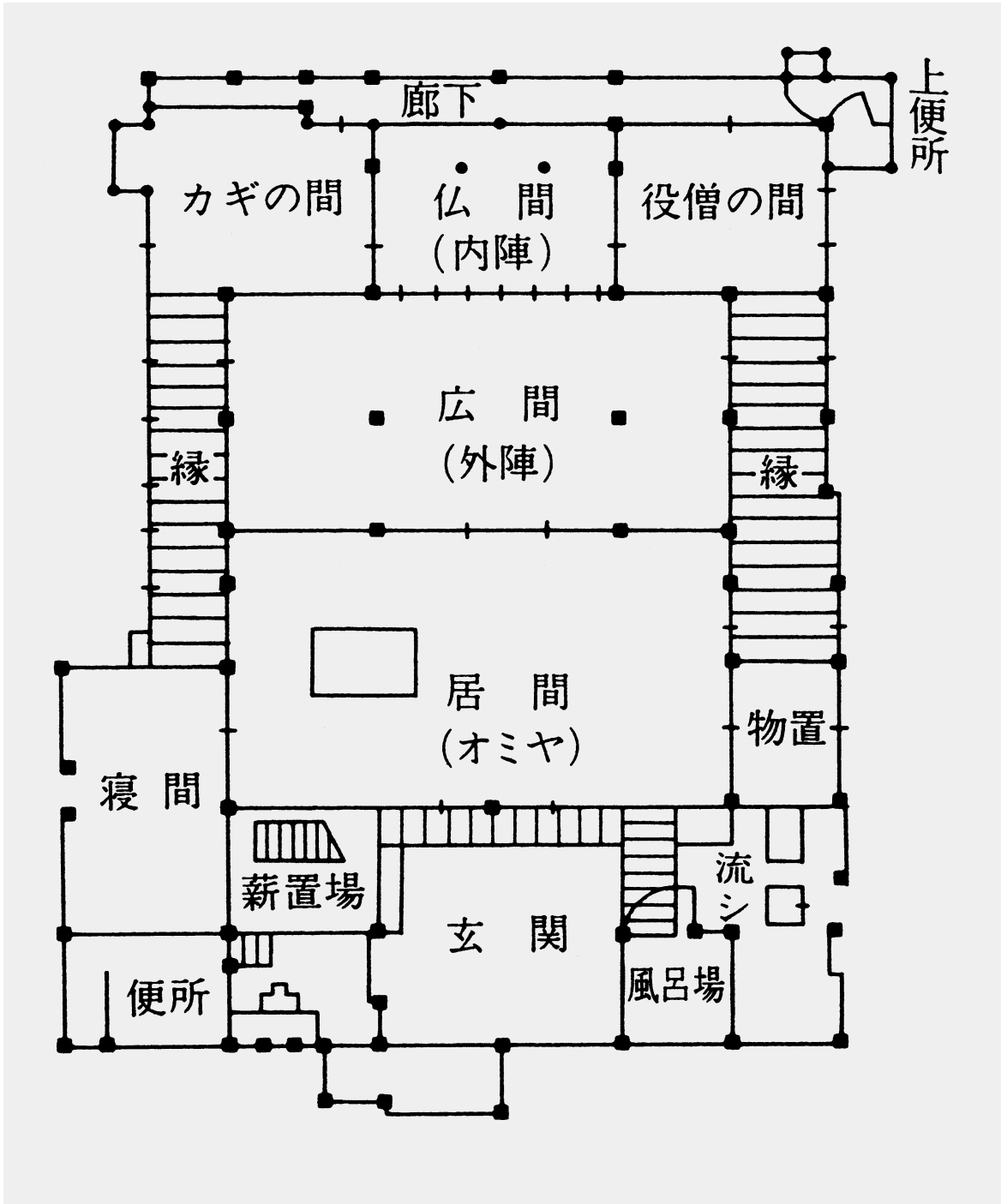
「蓮(如)・実(如)・証(如)の三代の間、寺と云もの其数知れて少々、坊号・俗名・同行頭、皆々所謂田畑守り、今に云毛坊主、(中略)寛永と成り、京並に田舎に至る迄、辻本看坊寺号を望申、一は世上静謐より事結構になり、坊主分(中世以来の寺僧身分の者)も威儀を取り繕ひ、他宗寺院の出会、近郷近里同居等これあるは寺号を名乗、されは他宗門の僧徒弥輕蔑す、道場坊々々と申を嫌ひ、寺号を名乗り度と望む、本山にも内徳(納得)なれば、其礼物を定免せらるる、近年の始初駈と寛永年の時世都鄙共に寺号を望申す、(後略)」(史料は読み下し、かっこ内は筆者)

上の文章は寛永15年(1638)に集録、延享4年(1747)に増補された真宗西派(浄土真宗本願寺派)に残された「紫雲院由縁起」という史料で、『真宗全書』36巻(1913年)に収められています。少し読みづらいかも知れませんが、要約すると、真宗では蓮如(本願寺8世)から証如(同10世)の時代(15世紀半ば~16世紀半ば)には寺院は少なく、大半が道場であり、「毛坊主」とも呼ばれた半僧半俗の人物が道場主として道場を守護していたが、近世寛永年間ごろ(1624~43)には、他宗の僧侶から輕蔑されるのを嫌がり、大半の道場が寺号を獲得し、毛坊主の道場主も正式な坊主(僧侶)になっていった(昇格した)と記されています。近世以前の本願寺派(真宗西派=本願寺派、真宗東派=大谷派の総称)では、本山をトップとした序列(寺格)が厳然と存在していましたが、その最下位に位置づけられていた道場は、近世初めの本願寺派の東西分離や、幕府・諸藩の宗



(旧)教覚道場の内陣

教政策も影響して、寛永期から延宝期（1673～80）にかけて、その多くが正式な寺院に昇格していきました。しかしそれでも、全国各地に寺院に昇格できない（しない）道場が存続しました。とくに、白山麓に典型的な「真宗地帯」と呼ばれる地域では、正式な寺院に比べ道場の割合が圧倒的でした。ちなみに近世越前の事例になりますが、筆者が調べた限りでは、大野郡で寺院の存在する村が13.8%であるのに対して、道場が存在する村は72.3%でした（むらめいさいちよう村明細帳など一種の公文書こうぶんしょ的性質を持った史料分析ですので、公権力が確実に掌握した寺院とは異なる道場の実際の比率は、もっと高かったと思われます）。



（旧）きょうかくどうじょう 救覚道場の間取り図

道場と寺院の違い

近世の道場には、道場主の家系が家業・家産・家名を相続する自庵と、全門徒が支えるかたちの惣道場の区別がありましたが、後者にも宗教儀式の担い手としての道場主の存在は不可欠でした。道場主には正式に出家した者も存在しましたが、近世では多くは百姓身分の者が勤め、半僧半俗と言える存在でした。その場合、道場主は視覚的にも有髪の毛坊主といわれる存在で、僧侶身分の者とは異なったものとして掌握されていました。では、近世の道場と寺院では何が異なったのでしょうか。近世の幕藩制国家は寺請制によって全人民を掌握しました。その一端を担わされたのが末端の在地寺院で、宗判を行う見返りとして門徒（檀家）から檀家役と呼ばれる収入等を得ていました。さらに本質的にはこの寺請制と密接に関わりますが、門徒の葬式執行権（引導を渡し法名を授ける）と追善供養権も在地寺院が掌握し、末寺の最大の収入源になっていました。道場の管理者である道場主は、これらの寺院（道場に対して上寺と呼びます）の下に従属しており（制度的には上寺の檀家として掌握）、上寺の僧侶に伴ってこれらの儀式を補助することはありましたが、主体になることは原則としてできませんでした。よって、それらを通じた収入も基本的に上寺のものになりました。この点が道場（道場主）と寺院（僧侶）の最大の相違点でした。

となると、上寺である有力寺院にとっては、配下道場が寺院になることは、その道場に付随した檀家が上寺から離檀することになり、端的に収入減となります。もちろん同格の寺院との寺格問題にも影響します。こうしたことから、上寺が配下道場の独立（寺院化）を容易に了承しないことが、道場が寺院になれなかった最大の理由であると思われます。この場合、いくら道場が近くに存在しても、法制度的（幕府法・個別領主法・本山の寺法各々のレベルが存在）には遠方の上寺が門徒の檀那寺であり、門徒の宗判と葬儀は檀那寺の特権でありました。

このように、法制度上、また身分表象という点で明らかに異なった道場と寺院、道場主と僧侶ですが、真宗信仰の伝播施設（者）という点では、少なくとも各地に存在した末寺寺院（寺僧）と大差はありませんでした。多くの門徒にとっては、遠方の寺院より、日常的には自村の道場主との接点のほうがはるかに親密であり、道場主こそが日常的宗教活動の担い手で、時には葬儀の一部も上寺に内証で彼らによって行われました。そのため近世を通じて上寺と下道場の争論が繰り返行われています。

*1 寺請制：江戸時代、武士以下全人民がキリシタン信徒ではないということを証明するため、その檀那寺に自らの檀家（檀那）にまちがいないということを示させた制度。

*2 宗判：寺請制の実施過程で檀那寺が行った押印。その帳面を宗門人別帳と呼ぶ。

近年の道場と道場の行方

「加賀市栄谷町で浄土真宗の信仰の場となってきた道場の「宝物」が一日から、地元集会所で一般公開される。二十二年にわたり道場主として宝物を守ってきた同町、本谷弘さん（七二才）が体の不調を訴えたことから地域で管理することになった。」（『北國新聞』1997年7月1日）

この新聞記事が記すように、現在も、「宝物」すなわち本尊をはじめとした信仰の対象物を安置する道場は、北陸地方の一部では確実に真宗門徒の信仰の「場」としてその機能を果たしています。

実は、大半の道場は明治初年の宗教政策と、それに呼応した本山の改革によって、法的には一度は「否定」されています。しかし、中世から近世を通じて多くの民衆の宗教生活を支えた道場・道場主が、一つの政策によって根絶されることはなく、明治10年代以降「説教所」「教会」の名称での再興申請が相次ぎ、そのいくつかが正式に末端宗教施設として「復興」しています。また本山に認められなかった場合にも、近世の上寺下道場を引き継ぐかたちで末寺寺院の支坊として、または公民館・コミュニティーセンターなどに仏壇を設けるかたちで、実質的道場として運営されている場合もあります。こうした中で、北陸地域などでは、近年まで、道場で布教を行う道場主は確実に地域民衆の精神的支えであり、地域の名望家的存在でもありました。しかし、近年の社会状況は大きく変化しています。筆者らが『勝山市史』資料編編集のために行った勝山市域の道場の調査を通じた実感に過ぎませんが、若者の都会志向や、最近の宗教問題から生じている宗教への無批判な嫌悪感も重なって、正式な寺院でない道場、正式な僧侶でない道場主の存続は決して明るいものではないように思えました。

ここでは、白山麓の道場の実態について詳しく書けませんでした。興味のある方は『尾口村史』や『白峰村史』などをご参照下さい。また、真宗の道場や道場主全般についてさらに詳しく知りたい方は、下記の文献をご一読いただければと存じます。

【参考文献】

千葉乗隆『中部山村社会の真宗』吉川弘文館、1971年。大桑斉『寺檀の思想』教育社、1979年。澤博勝『近世の宗教組織と地域社会』吉川弘文館、1999年。澤博勝「道場主」(高埜利彦編『民間に生きる宗教者』吉川弘文館、2000年)。『勝山市史資料編四』勝山市教育委員会、2000年。

< 福井県教育委員会学芸員 >

尾口村の花切り - 白山麓真宗門徒の習俗

橘 礼吉



長年の花切りで偏形したといわれるヒメコマツ

花切りとは

白山麓は日本の豪雪地帯で、約4か月間根雪となります。浄土真宗の各家では、仏壇に供える花は畑で栽培し、自前で立てます。ところで根雪期間中、仏壇へ花びら付の花を供えることはできなくなり、奥山に出かけ常緑樹の五葉松やクラシバ（フクラシバともいう）を採取し、花びら付きの花の代わりとします。これが花切りです。

尾口村尾添や東荒谷には寺院がなく、道場があります。六つの道場の中、四つが「内道場」といい、大型民家の仏間を寺代わりに当てた形式です。内道場の主人は坊様とよばれ、普段は一般の仕事につきながら僧侶役を兼ね、行事がある日には読経や説教をします。雪に閉ざされた期間中、道場や各家では、親鸞・蓮如・祖先の命日等の節目に花をとり替えます。そのため4か月分の花を貯えなければなりません。奥山に雪が積る直前、根雪期間中の花を各家や道場が山へとりにいくのが花切りなのです。

花切りの常緑樹とは

道場の最重要行事は、一里野スキー場ができるまでは12月21日より28日にかけての親鸞忌、いわゆる報恩講でした。この時の道場の花は「真花」という形に生けます。真花は松花ともいい、針葉樹のゴヨウマツ（ヒメコマツ・キタゴヨウマツの総称）・トガ（アオモリトドマツ）・モミ（コマツガ）が中心です。根雪期間の普段は、クラシバ（アカミノイヌツゲ・クロミノイヌツゲの総称）を生けます。尾添の林道場には、弘化5年（1848）京都で発行された『古流立花稽古本』があり、代々の坊様はこれを手本に真花を組みあげます。この立花は、真花と副にマツ、見越にウメモドキ、流にモミ、胴にクラシバ、前置にトガを使って荘厳な形に整えます。だから道場の花切りは、集落から出発して最終目的地へいく丸一日の途中、マツはどこの崖で、トガは一番高いところで、クラ



奥山でとってきたクラシバ（アカミノイヌツゲ）

尾添 沢正治家

シバは途中の尾根等と、細かく採取計画を立てておかなばなりません。道場の花切りは、マワリバンコという門徒の順番制になっていました。道場の花切り作業で、特に真花のマツ切りは細心の注意をはらいました。ヒメコマツは急傾斜地や岩壁に生えているので近寄るのに厄介です。真花は、真っすぐ直立した梢が必要で、最先端まで木登りをしなければならず、非常に危険です。対するに、各門徒の仏壇のための花切りは、真花の形を作ることもないので、多くの赤色実をつけたクラシバと、僅かのヒメコマツをとってきますので、道場のそれより楽でした。門徒は、採取した中で、直立した最も格好良いマツを、お初穂とよんで道場に献上していました。

*立花は、おのおのの役目をする枝でかたちづくりします。主役となる枝は、ひときわ高く立つ格好良い「真」、主役の「真」を引き立てる役の枝は「副」、共にゴヨウマツを使います。さらに中央部に、真・副の枝元を隠す役をする枝「胴」にクラシバを多く使います。また、奥行き感をだすための枝として、上段後方の「見越し」にウメモドキ、下段前方に「前置」としてトガを使います。そして、下段に流動感をもたす役「流」にモミの枝を配して、荘厳な形に整えます。

花切りはいつ出かけるのか

古老は「花切りは土用にする」と言っています。土用とは、立春・立夏・立秋・立冬の前18日間をさします。一般には立秋前の夏の土用がなじみ深いです。秋の土用は、立冬の18日前すなわち10月20日過ぎより始まり、立冬11月7日頃までの間です。なぜ土用の時に花切りをするのでしょうか。古老の体験を総合すると次のようです。私の常識では、常緑樹とは名前の通り冬も葉を落とさない木です。ところが奥山のマツ・トガ・モミ・クラシバの葉は、全部が冬越しするのでなく、約二・三割は晩秋に黄色に変わって落ちるという事実を知りました。そして奥山の常緑樹の落葉が終わりを遂げる時の目安が、体験的に「土用入り」に当たると、古老は位置付けしています。つまり、秋土用は、花切りのための大切な節目の日なのです。土用以前に花切りすると、集落の貯蔵桶の中で常緑樹の葉の一部が枯れ落ちてしまうのです。さらに11月10日頃には、曆上の八専はつせん（8日間）が始まります。山仕事をする人は、八専は天候不順で木にとって厄やくの期間とし、木は絶対に切りません。だから、花切りは、秋の土用から立冬までの間です。まず行事なのです。

花切りの季節は、奥山には既に初雪が降り、雪が少し積もっていることがあります。北側斜面では解けなかった雪が凍結し、足場は滑り易く危険度が高くなります。数年前の11月6日、花切り作業をしていた人が、凍結斜面でスリップして大怪我をされ、ヘリコプターで救出される事故が起こりました。花切りとは、常緑樹の落葉が終了した季



内道場親鸞忌の真花 尾添 山崎道場、昭和52年



真花の手本『立花稽古本』（弘化五年版）
尾添 林源常家蔵

節、これは新雪の季節とも重なり、また日照時間の短い季節での伝統的行事なのです。補足しますと、一家の男性にとっては、神仏のため、体力・神経を消耗する信仰行事でもあるのです。

花切りの作法

古老の語る花切りの作法は「人が踏まない所で切り、人が踏まない所へ捨てる」ことが鉄則で、特に戦前は厳しく守っていました。山道のすぐ脇は、人の行き来や時には小便等で穢れているので、道より離れた場所を選ぶのです。禅定道の所々にある聖地の木は、神仏が宿るとして、古くより花



東荒谷の花小屋 小田孝太家、昭和54年
小屋の背面より湧き出る清水を利用する。冬でも清水は凍結しない。

切りの目標としてきました。具体的には松新宮や美女坂を登りきった「養の河原」は、最も大切な花切り場でした。松新宮は、往時は建物四棟があり十一面観音・阿弥陀如来を祀っており、夏場は僧侶が常住していた白山信仰の拠点でした。養の河原は、先祖の霊が冥土におもむく前に憩う所で、先祖を供養する石積みがあった霊地でした。松新宮には、異常な形をしたヒメコマツの大木があります。梢が曲り、枝・葉の繁りが不自然で、普通でない奇形樹です。清浄地に生えた宿命のせいで、長年の花切りにあいながら過酷な環境で耐え抜いている姿です。

採取した花は、桶に入れ土蔵・納屋等で貯えます。東荒谷では、「花小屋」という美しいよび名の小屋で貯えます。集落は傾斜地にあり、斜面より清水が染み出る場所を選び、一平方メートル位を水平にならし、次に砂を敷きつめ、直接茅屋根を地面においた形にします。清冽な清水があり、その中にある砂に花を刺し込み、冬場生き生きした花を仏壇に供えました。花小屋は昭和末期には五棟ありました。

とり替えた古い花は、人の踏まない所すなわち普通のごみ捨場でない所、例えば屋敷の木の根本に置いたり、川に流しました。白山地域の伝統的花切りは時代がかわってきたため、その収集もむずかしくなり、門徒の苦勞も多くなっています。

花に魅せて神仏・先祖を招く

花切りは、一家の主人の責務であること、奥山の花切り場は白山の神仏や先祖の霊が憩う聖地であること、花で仏壇を飾り報恩講・正月を迎えることの三つは、花切りの意味を考える時の大切な鍵といえます。先祖を白山の奥山より迎える時、依りついてもらうのが奥山に生えている花なのです。民俗学者折口信夫は、マツやクラシバのような先祖のシンボル役をするものを「依代」と名付けました。依代の常緑樹・常磐木を仏壇に飾り、神仏・先祖を白山より迎え入れる尾口村の人々の作法は、日本人の素朴な神仏観の原形であると思います。

田中 稔

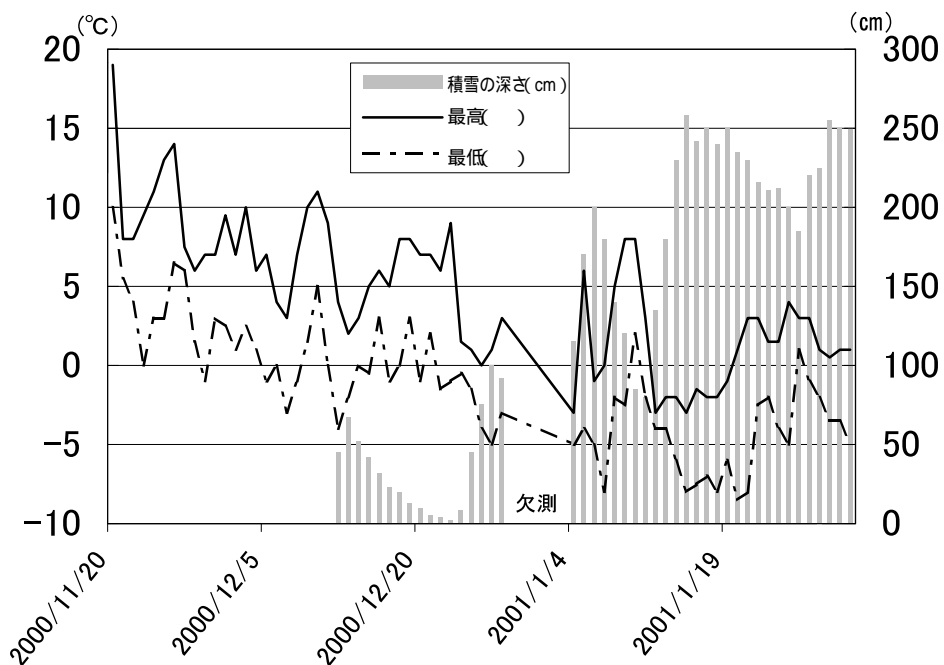
21世紀の夜明け、新世紀のブナオ山観察舎が開館しています。積雪計が2m50cmを越えたことが3回もあり、暖冬の予報が外れ周辺の動物達にも厳しい越冬になりました。今年の積雪時よりブナオ山観察舎へは一里野温泉一里野荘、天領の駐車場より右折の取付バイパス路経由となりました。尚除雪は従来通り観察舎下のゲートまで行われています。皆様方多数の御来館をお待ちしています。

また、展示コーナーに三谷産業株式会社寄贈のオオタカの剥製が加わりました。

1月のフィールドノートより

が観察されたもの

種名 / 日付	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
哺乳類	ニホンカモシカ																											
	ニホンザル																											
	キツネ																											
	リス																											
	テン																											
鳥類	イヌワシ																											
	クマタカ																											
	オオタカ																											
	カラス(類)																											
	ヤマドリ																											
	カケス																											
	アオゲラ																											
	アカゲラ																											
	コゲラ																											
	ジョウビタキ																											
シジュウカラ																												
ヤマガラ																												
コガラ																												
エナガ																												
ミソサザイ																												



ブナオ山における気温と積雪

センターの動き（11月11日～1月31日）

11.10～12	野生生物保護学会	（東京）	12.13	石川県自然解説員研究会役員会	
11.16～17	自然系研究機関全国連絡会議	（長野市）			（野々市）
11.16	ふるさと石川セミナー	（金沢）	12.15	カモシカ保護地域通常調査会議	（金沢）
11.29	白山の自然講話	（尾口村）	平成13年（2001年）		
12.3	県民白山講座「白山の万年雪」		1.21	県民白山講座「白山火山の活動」	
		（白峰村）			（金沢）
	白山自然ガイドボランティア活動報告会		1.24	石川県自然解説員研究会役員会	
		（白峰村）			（野々市）
12.5～8	ニホンザル研修	（千葉県鴨川町）	1.29	環境庁委託事業研究報告会	（つくば市）
12.11	吉野谷村史部会長会議	（金沢）			
12.12	白山国立公園管理計画検討会	（金沢）			

編集後記

－「道場」と「ほんこさん」－

白山麓の年中行事や生活の中で「道場」は、集落や村全体、ひいては白山麓一円の人々の生活・文化に影響を与えているようです。

私が物心がついた頃、祖母は毎年「ほんこさん」に連れていってくれました。秋の収穫が終わったころ、大根やゴボウ、あぶらげなどをついで寺に行き、持ち寄った食材を多くの方と一緒に料理をして皆と食べるのです。その日、祖母はいつになく喜々として、友達と話しをし、説教を聞いたりしていかにも楽しそうな、まるで「祭り」のような感じがしました。「ほんこさん」の一日はいわば公休日で、誰にはばかることなく休むことができ、心身ともに解放された至福のときだったのでしょう。40年も前の祖母たちの嬉しそうな顔を思い起こすとき、「ほんこさん」の風景が私の心に影響を与えているのかもしれない。

澤さんには白山麓の「道場」の歴史的な意義などを書いていただきました。また、橘さんには「花切り」の習俗について紹介していただき、これが日本人の神仏観の原形の一つであると示唆された点は参考になります。白山麓の多様な風俗習慣は厳しい自然のなかで生まれ、語り継がれ、今にいたっていると思われます。白山の風土をよく記録し、県民の皆さんに知っていただくのは私どもの役目だと思っています。読者の皆さんのご教示をお願いします。

（林 哲）

目次

表紙 南竜ヶ馬場ビジターセンター	柳田 亨 ... 1
白山の雪渓 - とくに千蛇ヶ池雪渓について（後編）.....	伊藤 文雄 ... 2
白山麓の道場 - 真宗信仰伝播の基盤	澤 博勝 ... 6
尾口村の花切り - 白山麓真宗門徒の習俗	橘 礼吉 ... 11
施設だより（ブナオ山観察舎）.....	田中 稔 ... 15

はくさん 第28巻 第3号（通巻117号）

発行日 2001年1月31日（年4回発行）
編集発行 石川県白山自然保護センター
920-2326 石川県石川郡吉野谷村木滑ヌ4
TEL07619-5-5321 FAX07619-5-5323
URL <http://www.pref.ishikawa.jp/recre/hakusan/haku.html>
E-mail hakusan@pref.ishikawa.jp
印刷所 株式会社 橋本確文堂